

巖山河

第13号

平成12年6月1日

発行

社団法人 沼津牧水会

目次

| | |
|-----------------------|----|
| 短歌文学全集「若山牧水篇」 のこと | 2 |
| 五ヶ瀬川水系の牧水碑 | 5 |
| 和歌と酒のフェスティバル に参加して | 8 |
| 第46回沼津牧水祭 | |
| 碑前祭・芝酒盛 | 10 |
| 短歌大会 | 11 |
| 第12回雛の歌会 | 12 |
| 文化講座 | 13 |
| サロン音楽の夕べ | 14 |
| 平成11年度事業報告 | 15 |
| 定款・編集後記 | 16 |



短歌文学全集『若山牧水篇』のこと

青山学院女子短期大学教授

高野公彦

(第一回若山牧水賞受賞者)



筆者近影

四月七日夕刻、九段の千鳥ヶ淵へ行き、満開の桜を眺めた。堀に沿ひ、ぎつしりと並んだ桜の木はみな染井吉野らしく、夕刻は特に美人の襟足のやうに白く見える。だが何百本もある桜の木のあひだを歩いてゆくうちに、花の白さが単調に感じられてくる。私は途中からしきりに山桜を思ひ出してゐた。山桜は自然の中で他の木々に混じつて咲いてゐることが多いから、花の色のほかに、他の木々の葉や山桜自身の葉の緑が目に入り、変化がある。染井吉野の華麗さを決して否定するわけではないが、清楚かつ野趣のある点で山桜はまことに好ましい樹である。でも遠くへ出掛

けなければ山桜には逢へない。山桜は、自然との結び付きが深いのである。

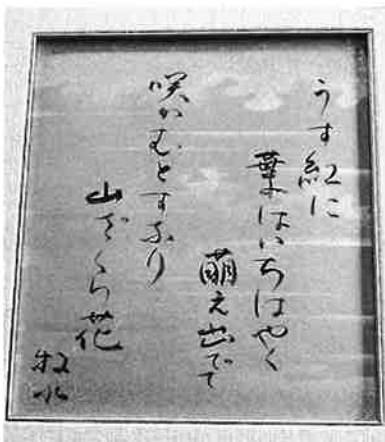
さて、牧水に有名な山桜の歌がある。今読み直してみても、少しも古びてゐない魅力的な連作だ。これは歌集『山桜の歌』の中であり、次のやうな前書が付けられてゐる。

三月末より四月初めにかけて天城山の北麓なる湯ヶ島温泉に遊ぶ。附近の溪より山に山桜甚だ多し、日毎に詠みいでたるを此処にまとめつ。

何日も天城の山や溪を歩きまはり、あちこちの山桜を眺めては歌を詠み溜めたものである。全部で二十三首あるが、そのうち幾つかを抜き出してみよう。

うすべにに葉はいちはやく萌えいでて咲かむとすなり山桜花
うらうらと照れる光にけぶりあひて咲きしづもれる山ざくら花
花も葉も光りしめらひわれの上に笑みかたむける山ざくら花

瀬瀬走るやまめうぐひのうろくづの美しき春の山ざくら花
吊橋のゆるるあやふき渡りつつおぼつかなくも見し山ざくら
椎の木の木むらに風の吹きこもりひと本咲ける山ざくら花
刈りならず枯萱山の山はらに咲きかがよへる山ざくら花
萱山にとびとびに咲ける山ざくら若木にしあれやその葉かがやく



牧水直筆の色紙 (当館蔵)

初めの二首は特によく知られた歌であり、秀作であることは今さら言を俟たないが、他の歌もまたいい。一連を読むと、こんなに豊かな自然があつた、そしてまた、こんなに大らかな歌ひ方があつた、といふことを改めて教へられる。

これらの歌を詠んだ場所について、牧水は「湯ヶ島の桜」といふ文章で詳しく書いてゐる。それによれば、三月二十八日、病後の疲れを癒すために山深い湯ヶ島の温泉宿をおとづれた。宿は狩野川の上流の溪間にあり、川の兩岸に木立が広がつてゐた。そして、木々に混じつてあちこちで山桜が咲き始めてゐたといふ。

「或は木立から抜けて真白な瀬の上にはあらはに咲き垂れてゐるものもある。また溪から山腹に茂つてゐる杉山の中に、一本二本くつきりと鮮かに咲いてゐるものもある。杉山のはづれが薄黄いろい枯萱かれかやの山窪となり、その山窪の原の中に一本ぼつつりと寂しく咲いてゐるものもある。(下略)」

湯ヶ島より更に上流には、簡素で原始的な〈世古の湯〉及び〈木立の湯〉といふ温泉があつた。牧水はそこにも出掛けて、山桜を眺めてゐる。

「二つの湯を囲む溪ばたの樹木のうち、殆ん

どその半ばが山桜ではないかと疑はるるほど、その花の多いのに驚いたことであるのだ。若木も多いが、更に老木が多い。樗かしや椎しいの茂みを抜き、この木とは思へぬほどのたけ高い梢を表はして咲き靡なびいてゐるものあれば、同じ様に伸び古りた幹や枝を白々とした瀬の真上にさし横たへて滴たる様に咲いてゐるものもある。世古の湯の崖に咲けば、対岸の木立の湯の背後の森には更に見ごとに咲き出でてゐるのである。」

素朴だが描写の確かな、いい文章である。牧水はのんびりと宿の座敷から山桜を眺めたのではなく、湯ヶ島近辺を歩き回つて自然の



大正11年 天城湯ヶ島温泉に遊ぶ牧水

中のさまざま山桜に出会ひ、それらを詠んだのである。この食欲さは、すなはち山桜への愛着の強さであり、また自然といふものに對する関心の深さでもあらう。右の文章を読みながら一連を読み返すと、歌への理解が深まり、一層味はひが増す。そして私たち現代の日本人も、牧水には及ばないにせよ、もつと自然への関心を持たなければならぬのではないか、と思はれてくる。

ところで……

今から六十数年前のことだが、第一書房から〈短歌文学全集〉といふシリーズが出版された。『与謝野晶子篇』『斎藤茂吉篇』『石川啄木篇』『北原白秋篇』『萩道空篇』『窪田空穂篇』など、計十二巻である。各歌人の主要な作品(短歌及び散文)を収録したもので、それらを一月、二月、三月……といふふうにして十二月に分類して載せてゐるのが特徴である。だから、どの季節にどんな歌を詠んだか、或いはどんな随筆を書いたか、といふことがすぐ分かる。また、それぞれの作品の後ろに編者が付けた短いコメント(出典や、その作品の背景などに触れたもの)が載つてゐるので、すこぶる有益である。

このシリーズの一冊に『若山牧水篇』がある。奥付を見ると、「昭和十一年八月一日発行」

となつてゐる。大悟法利雄の助力を得て若山喜志子が編集したものである。

右に挙げた山桜の歌も、「湯ヶ島の桜」といふ文章も、じつはこの本の〈四月〉といふところに出てゐる。

山桜の歌の最後のところには、『山桜の歌』より。大正十一年春の作で、書名『山桜の歌』といふのもこれらの歌から採つたもの。牧水の代表作の中に数ふべき一連である』といふ



「山桜の歌」初版本

添へ書きがある。また「湯ヶ島の桜」には、

『『みなかみ紀行』所載「追憶と眼前の風景」の一部。すぐ前の「山ざくら」の歌と対照しつつ読んでいただきたい』と添へ書きがある。いづれも編者が書いたコメントである。

また、ばらばらとページをめくつて十一月のころを見ると、「秩父の秋」と題して、

飲む湯にも焚火のけむり匂ひたる山家の冬の夕餉なりけり

など二十九首の歌が載つてゐる。編者のコメントに『『溪谷集』より。大正六年十一月の作で、初めは「溪百首」として『文章世界』に発表されたものの一部』とある。

そして次のページを開くと、「自歌自釈」と題する文章があり、たとへば右の一首について、牧水は「宿屋とは名ばかりの百姓家の奥座敷に蓄音機の音譜売の若者と合宿をして佗しい釣ランプの下に夕餉を済ませた。お茶とてもない、大きな菜罐に素湯を入れて持つて来た。その湯を詠んだものである」と書いてゐる。編者の添へ書きには『すぐ前の「秩父の秋」の歌の自釈で、『短歌雑誌』に発表されたままで、単行本には入れられてゐないもの』とある。

こんなふうには、歌が月別に配列され、またしばしばその歌に関する文章がその後ろに載



短歌文学全集「若山牧水篇」

せられてゐる。歌だけの場合や、散文だけの場合もあるが、いづれにせよ全てに編者のコメントが付けられてゐるから、まことに便利である。私はこの『若山牧水篇』を持つてゐて時々利用してゐるが、もう刊行されてから半世紀以上も経つてゐるから、本を見たこともない人も多い筈だ。もしこれを復刻して『若山牧水入門』といふやうなタイトルで新たに販売すれば、益するところ大であらう、と思ふ。それだけの価値のある労作だ。

それにしても、である。最初に挙げた山桜の歌などを見ると、現代の短歌がいつのまにか牧水短歌のやうな大らかな調べを失つて、こせこせしたものになつてゐるか、といふことに気づかされる。内容的には新しくなつた代りに、短歌が失つたものも大きいやうに思はれてならない。

五ヶ瀬川水系の牧水碑

榎本尚美

(元国立相模原病院副院長)



雑な流れをしている四つの川を「五ヶ瀬川水系」と称している。水量の豊かな季節には大きな鮎が棲むこの川は、建設省九州地方建設局延岡工事事務所が管理している。

その延岡市については、沼津市若山牧水記念館報第二四号で、延岡牧水顕彰会会長川並俊一氏の「延岡という街」に詳しく解説されている。

さて、明治二十九年、生地の坪谷村（現・宮崎県東臼杵郡東郷町）で小学校を卒えた牧水は高等小学校へ入学するため四〇kmほど離れた延岡へ遊学したが、平成一一年に開校百年を迎えた延岡中学が丁度その頃に創設され、牧水は一五歳の時第一回生として入学した。延岡に於ける生活は随筆「金比羅参り」にもあるが、文化の色濃い内藤豊後守の城下町で、文科系の学問に造詣の深い山崎庚午太郎校長に出会い、牧水の歌の才能はこの頃から発揮されはじめた。

一級河川「五ヶ瀬川」は宮崎県延岡市の海岸で日向灘に流れ込む全長一〇六kmの大きな川である。この川の源流は高千穂峽の奥、阿蘇の麓であるが、延岡市内で「大瀬川」と分岐し、日豊線鉄橋近くで再び合流している。更に、河口近くで北西から来る「祝子川」と、宮崎・大分県境の宗太郎峠の険しい山中から流れ出す「北川」が合流しているが、この複

なつかしき城山の鐘鳴り出でぬ幼かりし
日さきし如くに
故郷に帰り来りて先づ聞くはかの城山の
時告ぐる鐘

の歌にも見られるとおり、卒業までの通算八年間を過ごした延岡は牧水にとって第二の故郷とも云える街であるが、市民の敬慕の情の表れか市内に五一基の牧水歌碑がある。そのうち一七基は昨春開学された九州保健福祉大学構内「青春の散歩道」に市民有志の寄金で出来た比較的小型の歌碑である。私共もこの開通式に出席したが、学生が此処で思索を練るとして、ハイデルベルクの「哲学の小径」に倣って作られたという趣旨に、自然を愛した牧水の歌は全く相応しい。

その後、平成一二年三月に完成したのが五ヶ瀬川水系の碑である。その、五ヶ瀬川には右岸河口に平成八年三月建設省工事事務所によって「ふるさとの日向の山の荒溪の流れ清うして鮎多く棲みき」の碑が建てられた。荒

◎印は歌碑の形態のもので、無印は距離塚の上面に牧水の歌を刻したものである。なお、左岸・右岸は川の下流に向かつての左・右である。

五ヶ瀬川

◎川口に寄り寄る浪の穂がしらの繁きを見ればひき潮ならし (左河口)

山川のすがた静けきふるさとに帰り来てわが疲れたるかも (右四・八)

◎石越ゆる水のまろみを眺めつつころかなしも秋の溪間に (右五・〇)

山々のせまりしあひに流れたる河といふものの寂しくあるかな (右五・二)

君がすむ恋の国辺とわが住める国のさかひの一すぢの河 (右五・四)

見て立てるわれには怯ぢず羽根つらね浮きてあそべる鴨鳥の群 (右五・六)

幼き日釣りにし鮎のうつり香をいままのひらに思ひ出でつも (右五・八)

野と町のさかひの藪の木がぐれに春のあけほの行く水の音よ (右七・四)

瀬々に立つあしたの霏のかたよりてなびかふ藪にうぐひすの蹄く (右七・六)

浅川のせせらぎ澄みて流れたりうららけきかも鶯の声 (右八・六)

大瀬川

上つ瀬と下つ瀬に居りてをりをりに呼び交しつつ父と釣りにき (左七・四)

釣り暮し帰れば母に叱られき叱れる母に渡しき鮎を (左七・六)

瀬の鮎の罔を追へるかすかなる手ごたへをいま思ひ出でつも (左七・八)

◎早き瀬の此処に曲りて幅ひろき秋の川原に子等あそぶ見ゆ (左八・〇)

日向の国むら立つ山のひと山に住む母恋し秋晴の日や (左八・六)

北川

秋かぜは空をわたれりゆく水はたゆみもあらず葦刈る少女 (右一・四)

山ねむる山のふもとに海ねむるかなしき春の国を旅ゆく (右一・六)

おとなりの寅おぢやんに物申す永く永く生きてお酒のみましよう (右一・八)

◎春の海さして船行く山かげの名もなき港昼の鐘鳴る (右二・〇)

まんまるに袖ひきあはせ足ちぢめ日向にねむる父よ風邪ひかめ (右二・二)

春あさき田じりに出でて野芹つむ母のこころに休らひのあれ (右二・四)

うすべにに葉はいちはやく萌えてて咲かむとすなり山桜花 (右二・六)

病む母をなぐさめかねつあけくれの庭や掃くらむふるさとの父 (右二・八)
母を想へばわが家は玉のごとく冷たし父を思へば山のごとく温かし (右三・〇)
小舟もて釣りゆく人の羨しさよ竹藪かげに糸を垂れつつ (右三・二)

さて、牧水碑はこの様に年々増えて行くが、日本国内に幾つぐらいあるだろうか？

平成一二年五月現在、歌碑は二五八基、文学碑は八基、合計二六六基で、北は北海道から南は沖縄県まで分布している。

以上、歌碑としては珍しい五ヶ瀬川水系二六基の牧水碑を紹介した。



和歌と酒のフェスティバルに参加して

矢端 純子

鷓めじろ山雀つばめなきしきりさくらはいまだひらかざるなり

この牧水の歌を刻んだ歌碑の除幕式が、平成七年十月二十一日秋田市千秋公園にて行われました。急病のため、この歌碑の除幕式にご欠席の旅人師の思いが

旅さなか秋田にやどりし父のうたふかき
ゑにしに今日きざまれぬ

の歌となり、石川錬治郎秋田市長の元に届けられました。そしてこのたび、同じ歌碑に刻まれ、父子の歌碑となりました。

昨年、秋田市制百周年を記念して催された「和歌と酒のフェスティバル」には、全国から多数の皆様が参加し、十月十五日秋田ビューホテルに於て「牧水会歓迎レセプション」が開催されました。秋田市長の挨拶の挨拶、榎本篁子館長の挨拶に続き、佐佐木幸綱早稲田大学教授の乾杯で懇談に入りました。

温かいおもてなしに和む会場におかれた展示ケースには、金剛石の原石のように納められた『海の聲』初版本。表紙を描いた「平福

百穂兄に呈す 牧水生」と献詞のある一冊で、拝見した私たちには、秋田の酒を召し上がり、ここにこしていらつしやる牧水先生のお姿が現れたように思われました。



歓迎レセプションで挨拶をする石川市長

沼津牧水会林理事長、東京牧水会田原事務局長、延岡牧水顕彰会川並会長、哲西町牧水顕彰会羽場会長、北下浦観光協会青木会長、中原中也記念館福田館長、土肥町観光協会野



碑に献酒する榎本館長夫妻

毛会長、東郷町畝原収入役の挨拶があり、美酒に酔いつつ、秋田へのお招きに深く感謝をし、牧水先生、旅人師に思いを馳せました。

翌十六日千秋公園に於て、榎本ご夫妻、佐佐木教授、石川市長により、父子歌碑の除幕が行われました。父牧水に似て一字一句丁寧に書かれた旅人師直筆の短歌を刻んだ碑面に献酒をし、祝意を表しました。また、延岡牧水顕彰会の塩月眞氏の朗詠は皆々に感動を与え、千秋の樹木たちをも喜ばせました。



佐佐木教授、二本柳さんとともに

公募「日本酒」の応募短歌表彰式では、国内外から応募された一九六五首の作品の中から大賞に選ばれた二本柳綾子氏（青森県）の透き通るガラスのちよこで日本酒を飲みあかしたら朝焼みよう

について、「日本酒を朝焼けのイメージでとらえたところがすばらしい」との佐佐木教授による選者講評がありました。二本柳氏からは、「大酒飲みの友達に感謝します。」の言葉があり、会場の全員が一度にどつと笑い「和歌と酒のフェスティバル」を盛り上げました。「和歌の杜」テープカットの後、利き酒コー



牧水、啄木の友情の歌碑前で

ナーで美酒をいただき、即詠を短冊にしたためました。公園内の佐竹資料館に特別展示された牧水の半切や短冊を拝見し、平野政吉美術館では藤田嗣治の大作「秋田の行事」などを鑑賞しました。

一日千秋の思いで訪れた秋田をバスで出発しようとする時、市長の笑顔のお見送りを受け、誠にありがとうございました。

角館町の平福記念美術館で絵画を鑑賞し、田沢湖近くの宿に宿泊。翌十七日、石川啄木記念館を訪れ、北上川の川風に吹かれつつ、盛岡市へ向かい、馬場町の下橋中学校正門前



網取大橋袂の牧水歌碑を囲んで

の「牧水、啄木の友情の歌碑」を訪ねました。その後、郊外にある綱取大橋の袂の牧水歌碑を探しあてて、

山恋しその山すその秋の樹のこのまを縫へる青き水はた

牧水の短歌そのままの青き水を背にした木立のあいだを散策し、盛岡から秋田新幹線こまちにて帰路に着きました。往復の車中や宿での土肥の皆様や東京牧水会の皆様との交流も和歌と酒でございました。

（沼津牧水会会員、国立劇場勤務）

第46回 沼津牧水祭

碑前祭・芝酒盛

十月二十四日(日)午前十一時

碑前祭は毎年十月の第三日曜日開催しているが、昨年は第三日曜日が秋田市主催の「和歌と酒のフェスティバル」及び牧水と旅人父子歌碑の除幕式があり、沼津牧水会の会員が土肥町観光協会のグループと参加したために一週間遅れの開催となった。秋の一週間遅れの開催は、気温の変化も心配されたが、幸い暖かな中で定刻どおり開会。東海庵青龍師の献茶の後、理事市長の挨拶に続き、長澤靖夫新教育長の祝辞、ご多忙の中かけつけた斎藤衛市長の挨拶もいただく。榎本篁子館長の献花献酒に続いての挨拶も、牧水の孫らしく木目細かい内容であった。

すつかり定着した「中学生短歌コンクール」の入選作品の発表と表彰式を行う。歌は荒削りだが、生き生きとした表現が感動を与えてくれる。

花柳稔氏の舞踊を久しぶりに堪能する。続いて旧沼津合唱団の有志による「牧水のうた四首」は、千本松原の樹木に吸い込まれてゆくようである。六百余名の参加者が芝生に座



樽酒の「牧水」で乾杯



勇壮な黄瀬川太鼓

し、祭は佳境の芝酒盛に入る。宮代義幸沼津市議会議長に代わる井口八千喜副議長の音頭で乾杯。青空の下、美酒「牧水」の売れ行きも好調。おでん、焼そば、焼き鳥、牧路のシユウマイ、飲み物も好調に出る。

喉を湿し腹も満ちてきたところで、岳心流沼津愛吟国風会の詩吟。土肥町観光協会野毛会長から土肥の松原海岸にできた牧水の胸像と歌碑除幕式のPR挨拶がある。

馴染みになった裾野五竜太鼓の秋山ファミリーによる助六流のイナセな撥さばきに注目する。つづいて五竜太鼓と兄弟太鼓にあたる黄瀬川太鼓(森田紀代表)の演奏。同会は結成二十周年をむかえ、長野オリンピックにも演奏参加した。沼津の太鼓仲間のリーダー的存在であり、小学生から社会人までの幅広い構成の中で、地域の青少年育成運動として認知されている。地に足をつけた力強く醇朴な太鼓に、参加者も引きつけられ、手拍子が輪を広げていった。

芝酒盛は好天にも恵まれ盛り上がった。関係者の協賛、会員の協力等によって、今後さらなる展開を期待したい。最後にBGMの演奏をしていただいた大正琴の琴城会沼津の方々に御礼申し上げる。

(理事 金子安夫)

短歌大会

十月三日(日)
午前十時三十分
沼津市立図書館



沼津牧水祭短歌大会は、歌集『天泣』で第一回若山牧水賞を受賞された「コスモス」の高野公彦氏を講師にお迎えし、出詠歌二〇六首、一五〇名の参会者を得て、須永秀生氏の

司会で開かれた。

午前中の講演は「牧水のことばづかい」と題して、歌集『海の声』をはじめとする九歌集から抄出した作品をもとに、素材に応じた的確な表現をあげながら恋の不安、ほんのりとしたエロチシズムや、いじらしさなどを語り、特徴として、「ことがらを述べて対象を良くしほり、動詞を少なく端的に詠いあげている。人を傷つけたり蔑んだりすることのない作品のやさしさ、あたたかさは牧水その人である」としめくくられた。

午後の歌評は、一首ごとに青木が朗誦してから入る方法で行われ、出席者全員の作品に触れられた。「何気ない日常から詩をすくい上げ、特別なことがらに容易にとびつかない」等々、わかりやすく熱のこもった語り口は印象的であった。

入賞歌は次のとおりである。

選者賞(牧水賞の一席〜三席)

とつぎきて五十余年をすごしたりはまゆう
清き沼津の町に 沼津市 野口眞寿
やはらかき白き乳房に触れるごとてのひら
に載す絹ごし豆腐 沼津市 林 和

金星と木星あひ寄る西の空夕昏みゆく愛鷹
清し 御殿場市 勝間田一子

互選賞

裏町に風の路地あり魚屋の桶に泥鰯がひし
めきてゐる 富士宮市 橋口みち子

どろんこの五足の靴に玄関を占領されて今
夏休み 富士市 川辺典代

浜ことばの行商媼ら乗り込んで電車一輛み
つる磯の香 清水町 向笠律子

連れだちて草を食みいる放牧の子を見る馬
は母の目をもつ 小山町 藤曲剛志

農の手に撫でれば病母眼を細め働く掌ぞと
吾をいたわれる 土肥町 山田旭子

噛み合わぬ嫁との会話さり気なく厨にたち
て梨の皮むく 長泉町 石丸登美子

ほどほどを知る夫とゐてやすらぐも時に酒
豪の父が懐かし 相模原市 亀谷由美子

(理事 青木朝子)

第12回 雑の歌会

講師 沢口美美氏



今年も去る三月四日の土曜日に、第十二回雑の歌会が行われた。講師にお招きした「滄」の沢口美美先生は評論家としても出色の中堅歌人で、岸上大作氏らと学生時代に『具象』を創刊、更に岡野弘彦氏の「人」に属して鋭い評論活動を展開された。その頃の活動は評論集『歌の根拠へ』として一本にまとめられ、その新鮮な切口で評価を高めた。卒論に折口信夫を取り上げたこともあって、釈道空論をはじめ、師の岡野弘彦や武川忠一、寺山修司他の歌とその根源に迫る活動は大いに参考になる。また、大西民子論も詳しい。そんな先生故に、歌会は和やかな中に、厳しい目

の存在を秘めた歌話で終始し、充実した半日の時を過ごした。先生の採られた五首を紹介し、寸評を記す。

次の子は呼ばるる前の一瞬に頭をあげて
拳を握る 中川禮子

緊張感がいい。子どもの様子がよく判る。卒業式だろう。次第に自分の呼ばれる番が近づき、やがてその寸前、その一瞬を捕えた眼がするどい。

心中を迫りし君の髪白み初冬の駅に穏やかに佇つ 藤井初恵

背後に物語を秘めている。言葉の一つ一つに気配りがあり初冬の駅に雰囲気がある。

人目なき夜は眠れかし雑たちよきびしき
余寒に風邪ひきます 橘 初枝

雑祭りの歌の中で、この一首を選んだ。雑に対する優しさ。言葉がよく効いている。

玉葱の絵を見てをれば薄皮の剥がるる乾く音するごとし 川村富子

素材が魅力的、珍しい切口。この想像性が楽しい。

ぎしぎしの種の散らばりに紛れゆく夢の切れ端のようなせつなき 須永秀生

全体の流れるようなリズム。「種の散らばり」が危うい。ぎしぎしの種の散らばり方と下句の結び付きが不安定ではないか。芒の穂のよ

うな飛散に時間があるものなら。

全体の講評は、初心者の歌に対してその歌の良い所、直したい所を懇切に指摘。さらに、ことばの幹旋、助詞の効果、必要な助詞 unnecessary 助詞、修辭句の問題など、多岐に亘り、参加者は大いに納得し満足したようであった。生憎の雨の中出足を心配したが、記念館の和室は満席になり、ありがたい事であった。

なお、第一回雑の歌会の講師入野早代子氏も沢口先生の友人として清水市から参加していただき、会を盛り上げてくださった。

(理事 須永秀生)



文化講座



短歌とわたし

—出逢いの中で思うこと—

平成11年8月7日(土)13:30~記念館会議室

沼津牧水会理事の青木朝子氏を講師に迎え、「短歌とわたし」と題して語っていただきました。
文学少女だった青木さんが、短歌と出会い、また歌を通しての人の出逢いの中で、人生がより豊かになった、というお話に参加者も共感していました。

初心者のための短歌講座

平成11年8月~平成12年3月
毎月第2土曜日10:00~12:00
記念館会議室

牧水記念館短歌会

平成11年4月~平成12年3月
毎月第2土曜日13:30~16:00
記念館会議室



平成七年五月から本会理事須永秀生氏が講師をつとめ、初心者を対象にした短歌講座が始まりました。
その後「牧水記念館短歌会」として発展し、現在にいたっています。五年目をむかえてメンバーもすっかり顔馴染みになり、和気あいあいとすすめられています。



「初心者のための短歌講座」が、新たに受講者を募り、平成十一年八月から再開されました。
今回も須永秀生氏が講師をつとめ、前回を上回る多数の受講者が集まり、熱気あふれる勉強会になっています。

サロン音楽の夕べ

第1回 『名曲の夕べ』

日 時：平成11年7月18日(日) 午後6時15分

会 場：牧水記念館ラウンジ

出 演：黒川 浩 (ピアノ)
気賀 栄 (ヴァイオリン)
藤村俊介 (チェロ)

来場者：112人



第2回 『バロックの愛と涙』

日 時：平成11年9月18日(土) 午後6時45分

会 場：牧水記念館ラウンジ

出 演：三浦玲子 (ソプラノ)
櫻田 亨 (リュート)
杉山佳代 (チェンバロ)

来場者：120人

第3回 『ラウンジコンサートin牧水館』

日 時：平成11年10月9日(土) 午後6時30分

会 場：牧水記念館ラウンジ

出 演：山田 薫 (ヴァイオリン)
永坂邦彦 (テノール)
笠原由里 (ソプラノ)
青木祐介 (チェロ)
高井清志 (ピアノ)

来場者：111人



第4回 『フラウト・トラヴェルソとチェンバロによる J.S.Bachの夕べ』

日 時：平成12年1月22日(土) 午後6時45分

会 場：牧水記念館ラウンジ

出 演：朝倉未来良 (フラウト・トラヴェルソ)
杉山 佳代 (チェンバロ)

来場者：92人

平成11年度事業報告

| | | | |
|-------|--------------|-----------------------|---------------|
| 総 会 | 第13回 | 平成11年5月14日(金)午後6時～7時 | |
| 理 事 会 | 第1回(通算71回) | 11年4月16日(金)午後6時～7時30分 | 館報発行 |
| | 第2回(// 72回) | 11年5月14日(金)午後5時30分～6時 | 第23号 11年11月1日 |
| | 第3回(// 73回) | 11年6月29日(火)午後6時～7時30分 | 第24号 12年3月20日 |
| | 第4回(// 74回) | 11年9月1日(水)午後6時～6時30分 | 会報発行 |
| | 第5回(// 75回) | 11年12月1日(水)午後6時～7時 | 第12号 11年5月15日 |
| | 第6回(// 76回) | 12年3月7日(火)午後6時～7時 | |

1 調査研究事業

(1) 牧水顕彰全国大会(秋田市主催)

期 日:平成11年10月15日(金)～10月16日(土)

会 場:秋田ビューホテル、千秋公園

参 加 者:20名

(2) 土肥町牧水歌碑、胸像除幕式(土肥町観光協会主催)

期 日:平成11年12月11日(土)

会 場:土肥町松原公園地先

参 加 者:30名

2 第46回沼津牧水祭の運営

(1) 短歌大会

日 時:平成11年10月3日(日) 午前10時～午後4時

会 場:沼津市立図書館 視聴覚ホール

講 師:高野公彦氏

応募短歌:206首

参 加 者:130人

(2) 碑前祭・芝酒盛

日 時:平成11年10月24日(日) 午前11時～午後2時

会 場:千本浜公園 牧水歌碑前

参 加 者:約600人

3 文学講演講座の開催等

(1) 講 演

「短歌とわたし一出会いの中で思うこと一」

日 時:平成11年8月7日(土) 午後1時30分～4時

会 場:牧水記念館会議室

講 師:青木朝子氏

参 加 者:37人

(2) 短歌会「雛の歌会」

日 時:平成12年3月4日(土) 午後1時30分～4時

会 場:牧水記念館会議室

講 師:沢口美美氏

応募短歌:74首

参 加 者:62人

(3) 初心者のための短歌講座

日 時:平成11年8月～平成12年3月 第2土曜日 午前10時～12時

会 場:牧水記念館会議室

講 師:須永秀生氏

参 加 者:延べ185人

(4) 牧水記念館短歌会

日 時:平成11年4月～平成12年3月 第2土曜日 午後1時30分～4時

会 場:牧水記念館会議室

講 師:須永秀生氏

参 加 者:延べ174人

(5) 第10回「中学生短歌コンクール」募集・表彰

募集期間:平成11年6月4日(金)～7月20日(火)

応募短歌:1,482首(12校 1,482人)

入選短歌:50首(50人)

選 者:青木朝子、川口和子、須永秀生、杉山芳春、曾根耕一

表 彰:平成11年10月24日(日)

沼津牧水祭碑前祭にて

4 音楽イベント 「サロン音楽の夕べ」 牧水記念館ラウンジ

社団法人沼津牧水会定款（抜粋）

第一条 この法人は、社団法人沼津牧水会という。

第二条 この法人は、事務所を静岡県沼津市千本郷林一九〇七番地の一一に置く。

第三条 この法人は、歌人若山牧水を顕彰し、文学的業績の研究を深め、短歌文学の普及を図り、もって、教育文化の振興に寄与することを目的とする。

第四条 この法人は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- (1) 歌人若山牧水に関する調査研究
- (2) 沼津牧水祭（短歌大会及び碑前祭）の運営
- (3) 文学講演会及び文学講座の開催
- (4) 文学に関する各種出版物の刊行
- (5) 沼津市若山牧水記念館の管理運営の受託
- (6) その他前条の目的を達成するために必要な事業

第五条

- (1) 正会員 この法人の目的に賛同して入会した個人又は法人
- (2) 賛助会員 この法人の事業を援助する個人又は法人
- (3) 名誉会員 この法人に特に功労のあつた者で、総会の議決をもって推薦された者

第六条

会員にならうとする者は、入会申込書を理事長に提出し、理事会の承認を受けなければならない。ただし、名誉会員に推薦された者は、入会の手続きを要せず、本人の承諾をもって会員となるものとする。

第七条

この法人の入会金は、次のとおりとする。

- (1) 正会員 一〇、〇〇〇円
 - (2) 賛助会員 三〇、〇〇〇円以上
- この法人の会費は、次のとおりとする。
- (1) 正会員 年額 五、〇〇〇円
 - (2) 賛助会員 年額 一〇、〇〇〇円以上

〈理事長〉 林 茂樹
 〈副理事長〉 杉山 光男 河本與司幸
 〈理事〉 浅井 治 保坂 輝夫 田中 和男
 青木 朝子 須永 英男 金子 安夫
 八十濱俊一 杉山 芳春 四方 一彌
 〈監事〉 杉山 重義 鈴木 弘行

編集後記



四月一日から社団法人沼津牧水会事務局長、沼津市若山牧水記念館事務長に就任いたしました。

沼津が誇る若山牧水を顕彰し、併せて短歌を中心とした文学と文化の活動拠点に位置づけられているこの記念館で、その活動の一端を担える機会に遭遇できましたことは大きな喜びでございます。

全国各地には牧水の顕彰活動を展開する組織が数多くありますが、規模の大きさや組織力、実績などにおいて沼津牧水会は随一と伺っています。

これは、多くの関係者の献身的なご努力と沼津市や関係機関、団体等のご理解、ご支援の賜とも伺っています。

各界、各層を代表する先人や理解ある沼津市内外の方々によって築かれた沼津牧水会の歴史を更に積み上げるために、微力を尽くして参る所存でございます。ご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。

（岩原秀介）

事務局の一員として、会報・館報の編集に携わっております。玉稿をお寄せいただいた皆様に御礼申し上げます。より充実した広報誌をめざしてまいりますので、ご意見をお寄せください。

（大島葉子 市川真理）